

三田全信先生を偲んで

——法然上人伝研究会の日々から——

平 祐 史

三田全信先生は、近頃には珍らしい在野の学侶であった。先生は、紫竹の光念寺という巷間の寺院住職として、多忙な毎日の檀務をつとめつつ、寸暇を惜しんで読書を楽しみ、倦めば酒を愛し、それを友として、ただひたすら浄土宗史の研究にうち込まれ、大部の著作を残された学匠であった。

私が先生に初めて拝眉の機を得たのは、昭和三十年四月、総本山設立の仏教文化研究所（学頭塚本善隆先生）の研究生になってからで、三田先生は研究員として毎週開催の研究例会でご活躍になっていた。そしてさらにお近づきを得たのは、法然上人伝研究会が再編され、新たなプロゼクトチームに参加するようになってからである。この研究会は、今は亡き岸信宏門主親宰の研究会で、そのメンバーは、伊藤真徹、三田全信、香月乗光、藤堂恭俊、伊藤唯真、成田俊治の諸先生、それに私であった。

研究会は毎週木曜日午後四時より、門主室で開かれ、『四十八巻伝』を中心に、各種の古法然伝を対照し、各個の研究発表の機会が与えられた。時あたかも昭和三十六年は、宗祖法然上人の七百五十年の遠忌にあたり、これをひかえて私共の研究会も、その成果の一部を世に問うと努力していた。宗祖の遺跡岡山の誕生寺を始め、流通地の笠島や四国方面の調査旅行、弘願本の撮映に国立奈良博物館や堂本印象邸へ出向いたり、更には合宿による校合や対照研究の作業など急ピッチで研究を進めた。研究会員の多くは、校務をもち多忙で、つい研究も停滞しがちであったが、三田先生は自から主任的立場で、研究費の調達から例会や調査の設営などの会務万端を引き受けて頂き、積極的に会の運営をしていただいた。かくて昭和三十六年三月の大遠忌中に『法然上人伝の成立史的研究』第一巻を上梓し、大師前へ奉呈することが出来た。

先生は五十歳前後で学究生活を再開された方で、青年期のそれはいざ知らず、戦中の中断は言うまでもなく不能に近く、戦後は住職として衰微した寺門経営の再建に日夜努力を重ねられたようで、その目的がほぼ達成される見通しがついた頃、再び学究生活に戻られたようである。従って頭初はその空白は否めず、戦後の急速に発展する新しい歴史学の研究方法や成果の洗礼をうけた私共の若い学徒には、先生の研究や発表には、いささか物足りなく納得でき難いものがあったので、生意気にも先生の労作を論難批判をすることもしばしばであった。がしかし、先生の豊富な読書量とたゆまぬ史料の精読には、いろいろ教示されることが多く、再検討することによって、新見解を示すことができた。その上精力的な論文の執筆には、目を見張るものがあった。次々と論文を公表され、昭和三十四年一月には、『浄土宗史の諸研究』を上梓し、意気軒昂たる所を見せられ、法然伝研究会にあっては、文字通り牽引力となって督促され『法然上人伝の成立史的研究』第四巻の研究篇においては、率先原稿を提出された。その大きな原稿量に畏敬の念をもって見入ったものである。そしてその一部を所載し公刊したのであった。この未刊部分を『成立史的法然上人伝の研究』として世に問われ、学位請求論文となったのであった。

この間、眼疾により入院手術、ついで檀務の途上で交通事故により負傷入院されるなど、一時は再起不能かと思われ、

岸門主も大変ご心配になられ、異例ながら親しくお見舞に足を運ばれたこともあった。それほど先生は研究会にとって大切な人であった。このような不慮な事態に臨んでも、先生は不死身のように強靱な精神力でもって、再び研究会の戦列に戻ると、『浄土宗史の新研究』を刊行され、身をもって私共に学問のすさまじさを教えていただいたのであった。

先生はこよなく酒を愛せられた。研究会のメンバー中、伊藤真、香月、藤堂の諸先生もまた酒を愛せられたので、研究会が終るとよく祇園下の「はぎはら」に足を向けられ、私共もお相伴することがあった。調査旅行などでは、集合場所の駅の改札口で持参の瓶を開けて、すでにチビチビとやっておられ、列車に乗れば言うまでもないことであった。

先生は、佛大のために蔭ながらいろ／＼ご尽力を得た。私が学生部長在任中に、紫竹寮の建設に当って、敷地の提供をたまり、また本山奨学金が不足した時には、ご無理を願って、光念寺奨学金を設立していただいて急場をしのいだこともあり、引き続いて数年来学生の育英に浄財を寄せていただくなど有形無形の学恩を蒙ったのであった。

最後に、先生の生涯をまとめれば、名聞利養のための学問ではなくひたすら宗祖への思慕と報恩のための学問であった。この信仰的情熱が、先生の学問形成の源泉であったと考えられるのである。